

## 「ステーブルコイン vs トークン化預金 vs リテール CBDC」

パネル討論趣旨

座長 塩路 悦朗（中央大学）

ブロックチェーン技術の進展は決済の世界を大きく変えようとしている。特に近年、ステーブルコインの使用が米国を中心に世界的に広まっている。2025 年米国で成立したジーニアス法はその普及を後押しするものと考えられており、現在ステーブルコイン全体で 3000 億ドル程度の時価総額があるものと見られている。特に、伝統的な決済システムの弱点であったクロスボーダー取引において、ステーブルコインによる決済の効率化に期待する向きは多い。

日本でも 2025 年秋、円建てステーブルコインが初めて発行された。2026 年に入ってから、大手証券会社やメガバンクが共同でステーブルコインを使った株式売買の実証実験を計画するなど、一気に普及に向かう気配がみられる。

一方、ステーブルコインは「デベッグ」（その価値が本来なら等価であるはずの法定通貨の価値を下回ってしまうこと）という現象が観察されるなど、その安定性を疑問視する向きも多い。そうした識者の中にはトークン化預金（銀行口座にある預金をブロックチェーン上で直接やり取り可能にしたもの）を中心とした決済システムの構築を主張する声もある。またリテール型の中央銀行デジタル通貨（CBDC）が新しい決済システムの中でどのような役割を果たすのかも、重要な未解決課題である。

本パネル討論では、こういった問題に永年取り組んで来られた 3 名の専門家の方々をお招きした。

・ 瀧 俊雄 氏（株式会社マネーフォワード マネーフォワード総合研究所 長）

・ 山岡 浩巳 氏（フューチャー経済金融研究所・デジタル通貨フォーラム）

・ 小早川 周司 氏（明治大学政治経済学部）

パネリストの皆さまには、これまでに培われたご知見に基づき、デジタル技術を活用した新しい決済システムのあるべき姿と課題を議論して頂く予定である。